

グローバル化に対応した附属小型ESDカリキュラムの開発研究 —世界遺産学習「宮島」の開発を通して—

松岡 靖 佐伯 陽 志田 正訓 中丸 敏至
由井 義通 樋口 聡

1. はじめに

昨年度、附属小学校では、グローバル化に対応した教育実践を行うため、ESDカリキュラムと英語科カリキュラムの創造を学校独自の特色として示した⁽¹⁾。

この中で、ESDカリキュラムに関しては、カリキュラムの教科内容に関して実証的検証が不十分なまま、教科横断的にカリキュラムが構成されていたため、目標と内容相互の関連と内容面の段階性が不明確であることが課題であった。

そこで、本研究では、これまでに策定した附属小型ESDカリキュラムの充実を図るために、世界遺産学習に焦点を当て、「宮島」を事例とする教材開発と授業実践を行い、実証的にカリキュラムを検証・改善を図り、本校のESDカリキュラムの有効性を高めることを目的とする。

所期の目的を達成する為、次の手順に基づき研究を行う。

- ① ESD概念と世界遺産学習との関連の明確化
- ② 世界遺産「宮島」の教材開発
- ③ 世界遺産学習の実践
- ④ 実践的検証に基づく、附属小型ESDカリキュラムの改善
- ⑤ 関連学会における研究成果の発表

2. ESDの研究的課題

ESDは、「持続可能な社会の構築」を目指す方向概念である⁽²⁾。価値多元化社会といった教育の目指す方向性が揺らいでいる現代において、教育は何を目指して為されるべきか、そのことを説明する枠組みであると言い換えることもできる。実際、「持続可能な社会の構築」といった文言は、ヨハネスブルグ・サミット(2002)以降の「持続可能な開発のための教育」や教育振興基本計画(2008)の「持続発展教育」といった

文言に比べ、ESDの理念を具体的に示したものであり、「持続可能な社会の構築」に適う人材を育成する為に教育はなされるといった方向性は、誰もがその意義に共感できることであろう。しかし、そのような方向概念が、具体的な学習レベルにおいて、様々な立場からその目標、内容、方法に関して検討されることで、概念が多様に拡充し、昨今は、何をやってもESDといった、包括的で曖昧な教育として捉えられてきたのではないだろうか⁽³⁾。このことは、次の二点の問題点を有する。

第一は、ESDの教育としての

学年	基礎能力		基礎能力		基礎能力		基礎能力		基礎能力		ESDの理念	ESDの理念
	英語	外国語	英語	外国語	英語	外国語	英語	外国語	英語	外国語		
第六学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 国際交流	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科 社会	systems thinking critical thinking	理科・数学 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念
第五学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 国際交流	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念
第四学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 (基礎)	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念
第三学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 (基礎)	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念
第二学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 (基礎)	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念
第一学年	systems thinking critical thinking	外国語活動 (基礎)	systems thinking critical thinking	英語 社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	理科・社会 理科・社会	systems thinking critical thinking	英語活動 外国語活動	ESDの理念	ESDの理念

表1 附属小型ESDカリキュラム

Yasushi Matsuoka, You Saeki, Masanori Shida, Toshinori Nakamaru, Yoshimichi Yui, and Satoshi Higuchi: Improvement of the Education for Sustainable Development curriculum in Hiroshima University's attached elementary school for globalization: Focusing on the Miyajima World Heritage Site.

独自性が明確にならないことである。ESDの教育理念が矮小化され、例えば参加体験型の活動であればESDであると曲解され、結局、這い回る学習に陥る可能性があることである。第二は、教科等の役割が明確にならないことである。ESDが学際的な取り組みであったとしても、各教科において、その理念をどのように生かすのか共通理解がない限り、ESDの意義を示すことは難しいであろう。

以上の問題意識に基づき、特に世界遺産教育に焦点を絞って検討したい。世界遺産教育は、これまでユニセフにより新しい教育理念として示されたものであり、この教育が、ESDのコンテンツとして位置づくことで、どのように学習することがESDの理念に合うことになるのか明らかにすることが、その独自性を示すことにつながると考えるからである。また、ESDを方向概念として捉えた時、社会科教育におけるESDは、社会科の究極目標である公民的資質を説明する枠組みとして位置づく。つまり、公民的資質をより具体的な持続可能な社会構築の担い手としての資質と捉え直すことができるのである。更に言えば、ESDを目指す社会科教育における学習内容は、持続可能な社会形成を阻害する社会問題や持続可能な社会を可能にした地理的・歴史的的事象等が対象となることも指摘できるであろう。そこで、本研究では、世界遺産「宮島」を事例に、小学校社会科における世界遺産学習のESD的意義を実証的に明らかにし、カリキュラム構成につなげたい。最初に、ESDと世界遺産教育との関連について整理しておこう。

3. ESDと世界遺産教育

ESDと世界遺産教育には、どのような関係にあるのか⁽⁴⁾。ユネスコにおける世界遺産教育が始まるのは、1994年とされる⁽⁵⁾。この年、「世界遺産の保存と促進への若者たちの参加」といったパイロット・プロジェクトが始まり、「ユネスコ協同学校」に参加校において世界遺産について学習する機会が設けられた。翌年には、このプロジェクトの活動の一つである世界遺産青少年フォーラムが、ノルウェーで開催され、世界各地から集まった「ユネスコ協同学校」の教員・生徒に世界遺産に関する経験や学習成果を交流する機会が提供され、以降、大阪、ロシア等で国際フォーラムが開催されることとなった。そして、世界遺産青少年フォーラムの提案を受け、教師用教材『若者の手にある世界遺産』が1998年に出版された。この教材では、世界遺産教育の総合的・学際的な観点から、具体的な教育手法として、討議、調査、実習、視覚授業、世界

遺産現地見学、ロールプレイが提唱され、生徒の主体的な学習関与を尊重する方針が貫かれている。また、テーマとして世界遺産条約、アイデンティティ、観光、環境、平和文化が示され、世界遺産そのものを学ぶだけでなく、世界遺産の持続性の観点から、観光・環境・平和と世界遺産の関係性を多角的に学習することになっている。このような教材は、1999年には130か国、約700のユネスコ協同学校に配布され、世界中で活用されているのである。

以上、ユネスコの世界遺産教育について概観してきたが、2005年に世界遺産教育は、ESDのコンテンツとして位置づくこととなる。

2002年の国連総会において、2005年から2014年までの10年間で「国連持続可能な発展のための教育（ESD）の10年」とすることが決議され、世界遺産教育や環境教育が、ESDの概念図の中に位置づけられた。その理由として、ESDの実践には、2つの観点が必要であり、一点目は、人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと、もう一点は、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むことであるとし、そのためには、環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別の分野にとどまらず、環境、経済、社会の各側面から学際的かつ総合的に取り込むことが重要であるとした。つまり、関連する様々な分野を「持続可能な社会の構築」の観点からつなげ、総合的に取り組むことが大事だとしたのである。これらから検討すると、持続可能な構築に関わる諸問題の一つの分野として、世界遺産の問題がとりあげられたと見なすことができる。

このことと関連して、田淵は、「多くの世界遺産は「持続性の証明」であり、「幸運にも残った」ものである。そのかけがえのなさを確認させる必要がある」と指摘し⁽⁶⁾、世界遺産教育とESDの共通点として、「何世代にもわたって保護されてきた世界遺産は、現世代の人々だけのものではなく、次世代の人々にバトンタッチしなければならないという認識でも共通している。」⁽⁷⁾と持続性といった観点からそれらの共通点を指摘している。

したがって、ESDとしての世界遺産学習は、文化遺産、自然遺産に関して言えば、「持続性」がキーワードであり、そのような世界遺産の社会的意味は、「持続性」を実際に証明する社会事象として意義づけることができるであろう。更に、社会科授業においては、このような「持続性」を可能にした世界遺産が存在する社会が学習対象となる。実際、世界遺産が維持されてきたのは、それを可能にした社会が存在したか

らであり、今後、社会の中で維持・継承されなければならない遺跡なのである。

したがって、社会科授業においては、「世界遺産は、どのように維持されてきたのか」また、「なぜ、維持できたのか」、そして、「これから世界遺産は、どのようにして維持されなければならないのか」といった世界遺産の「持続性」を可能にした社会の仕組みと「持続性」の継承を可能にする社会の仕組みを追究することが求められるのである。そして、このことが、社会科において世界遺産学習を学習するESD的意義であり、言い換えれば、世界遺産教育がESDに位置づくことで、世界遺産学習を通して「持続可能な社会」の仕組みを学習する可能性を高めたことを指摘しておこう。では、世界遺産「宮島」には、どのような「持続性」を可能にした社会の仕組みが存在したのだろうか。

4. 世界遺産「宮島」の仕組み

(1) 世界遺産「宮島」の概要⁽⁸⁾

世界遺産「宮島」の正式な名称は「厳島」(国土地理院管轄)であり、世界遺産には、厳島神社と周辺の建造物群、これらと一体となっている前面の海、背後の弥生原始林を含む森林地域が登録されている。古代から島そのものが自然崇拜の対象だったとされ、信仰上の理由から人間活動がほとんど加えられてこなかったこともあって、日本古来の自然の姿が良く残されている。

厳島の代表的建造物である厳島神社は、593年佐伯鞍職により創建され、1168年に平清盛によって今の形に造営された。平安時代末期以降は厳島神社の影響力の強さや海上交通の拠点としての重要性からたびたび歴史の表舞台に登場している。しかし、たびたび火災や高潮、台風、土石流などの被害を受けたが、そのつど鎌倉幕府や室町幕府の庇護を受け復興し、現在の本社本殿は1571年に毛利元就により再建されたものとされる。

江戸時代中期頃から、日本屈指の観光地として栄え、現在では人口1800人余りの島に国内外から年間300万人を超える参拝客及び観光客が訪れている。2011年には、世界最大の旅行クチコミサイト「Trip Advisor(R)」の日本法人・トリップアドバイザー⁽⁹⁾が「外国人に人気の日本の観光スポット」トップ20の第1位と発表し、原爆ドームと並んで広島県の代表的な観光地の一つとなっている。

(2) 世界遺産の選定基準

厳島神社が世界遺産(文化遺産)として登録される

には、登録基準⁽¹⁰⁾(文化遺産は6項目)のうち1つ以上満たす必要がある。厳島神社は4項目の価値基準を満たすとされた。それらの選定理由は次のようになっている⁽¹¹⁾。

1. 厳島神社は12世紀に時の権力者である平清盛の造営によって現在みられる壮麗な社殿群の基本が形成されました。この社殿群の構成は、平安時代の寝殿造りの様式を取り入れた優れた建築景観をなしています。また、海上に立地し、背景の山容と一体となった景観は他に比類がなく、平清盛の卓越した発想によるものであり、彼の業績を示す平安時代の代表的な資産のひとつです。価値基準(1)
2. 厳島神社の社殿群は、自然を崇拝して山などを御神体として祀り、遥拝所をその麓に設置した日本における社殿建築の発展の一般的な形式のひとつです。周囲の環境と一体となった建造物群の景観は、その後の日本人の美意識の一基準となった作品であり、日本に現存する社殿群の中でも唯一無二のもので、日本人の精神文化を理解する上で重要な資産となっています。価値基準(2)
3. 日本に現存する社殿建築の中でも造営当時の様式をよく残し、鎌倉時代に建築された数少ない建造物となっています。度重なる再建にもかかわらず、平安時代創建当初の建造物の面影を現在に伝える希有な例です。また、平安時代の寝殿造の様式を山と海との境界を利用して実現させた点で個性的で、古い形態の社殿群を知る上で重要な見本です。価値基準(4)
4. 厳島神社は、日本の風土に根ざした宗教である神道の施設であり、仏教との混交と分離の歴史を示す文化資産として、日本の宗教的空間の特質を理解する上で重要な根拠となるものです。価値基準(6)

世界遺産の価値基準と選定理由に基づけば、厳島神社は、造営当時の寝殿造り様式を残し、海上に立地し、背景の山と一体となった景観が今日まで維持されてきたことが、世界遺産選出の大きな理由であることが指摘できよう。

(3) 世界遺産「宮島」の仕組み

厳島神社とその周りの自然は、どのようにして今日まで維持されてきたのであろうか。このことに関して、長谷川は、「世界遺産の持続可能性は、遺産の保存、住民等の関係者の福利、世界遺産に係る経済活動(観光等)の三つの調和の上に成り立っている」と指摘し、世界遺産の持続可能性のために必要な観点を示している⁽¹²⁾。これらの観点は、宮島に当てはめるな

ら、宮島の自然と一体となった景観の保存、宮島島民の福利、宮島の景観を維持できる観光等の経済的な裏付けと解釈することができよう。そこで、本研究では、「観光」を視点に世界遺産「宮島」が維持されてきた仕組みを明らかにしておきたい。

観光地の立地に関して、新たな観点を示したのは小松原である⁽¹³⁾。小松原はウェバーの工業立地論に基づき、観光資源、サービス、交通の3要素からなる観光地の立地条件を示した。

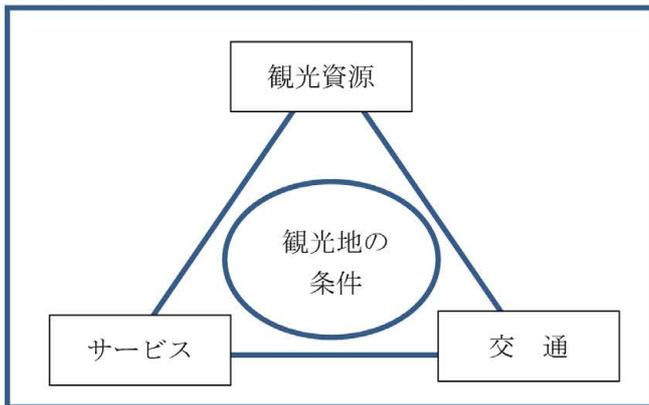


図1 観光地の立地条件

つまり、この3要素が揃っていることが、宮島が観光地として成立する条件となる。そこで、其々の要素に関して観光の点から検討すると、次のようになる⁽¹⁴⁾。

交通の面では、宮島は長い間、神聖な島として人が住むことも許されなかったが、中世になると厳島神社に仕える人たちが住むようになる。そして、江戸時代には参拝客が多く訪れ、観光地として賑わっていく。このような観光客を、対岸の廿日市や地御前から宮島まで運ぶために、渡海船や番船が就航し、渡船業者が定期的に観光客を運んでいたとされる。その後、明治に入ると10数隻の渡海船が、1894年には蒸気船が就航したことが確認できる。そして、1897年には、現在の宮島航路が確立し、宮島駅ができたことにより、鉄道と船による輸送が可能となった。現在、JRによるフェリーと広島電鉄（私電）によるフェリーが就航し、その他、原爆ドームや市内のホテルから宮島をつなぐ定期便が就航している。これらのことから、江戸時代以降、時代に応じて交通機関が発達し、観光客のニーズに応じて利便性を高めていることが指摘できる。

サービスの面では、江戸初期頃、大根屋（現宮島グランドホテル有もと⁽¹⁵⁾）が開業し、徐々に宿泊施設が整備され、現在、宮島には約25の旅館・ホテルが整備されている。また、宮島独自のお土産として、江戸

時代には色楊子、杓子（しゃもじ）が提供され、明治時代に入ると、伊藤博文のエピソードからもみじ饅頭が考案されている。つまり、サービスの面からは、時代の移り変わりに応じて宿泊施設が整備され、その土地特有のお土産が生み出されていることが指摘できる。

観光資源の面では、宮島の代表的な建物である厳島神社は、1571年に毛利元就により再建されて以降、幾度ともなく台風等の自然災害によって倒壊・浸水の被害を被っている。しかし、その度に卓越した修復技術と建造の工夫（海水の圧力を弱める床板の隙間、回廊が壊れることで本殿を守る構造等）によって、同様の景観を維持している。また、周りの自然は、信仰上の理由から人間活動ができなかった（伐採の禁止、耕作の禁止等）ことにより維持されている。つまり、観光資源の面からは、厳島神社とその周りの自然は、建造の工夫と信仰上の理由から維持されてきたことが指摘できる。

以上、3点の観光地としての側面が、江戸時代以降、世界遺産「宮島」が維持されてきた理由であると言えるであろう。そして、その前提として、地理的に陸とは隔離された島であったこと、神聖な島としての風習が今も残り、神域として大事にされたこと等が要因として挙げられる。

したがって、「宮島」の「持続性」は、観光地であり続けた観光地の仕組みが存在したことが大きな要因の一つである。では、このような社会の仕組みを読み解く社会科授業はどのように構成すればよいのであろうか。

5. 世界遺産「宮島」の単元構成原理

(1) 単元構成の視点

世界遺産「宮島」の「持続性」を明らかにするために、観光地の仕組みを読み解くには、その「持続性」を可能にした社会の仕組みと「持続性」の継承を可能にする社会の仕組みを追究する単元構成が求められる。そこで、次の視点に基づき単元を構成していく。

<単元構成の視点>

- ・「持続性」を可能にした地域社会の仕組みを多面的に認識させるために、歴史・自然・風習・交通等の視点に着目させ、子どもたち自身で調査活動を行い、世界遺産「宮島」の観光地としての仕組みを読み解かせる。
- ・世界遺産「宮島」の観光地としての仕組みの多面的な認識に基づき、観光地としての条件と価値を考え、持続可能な宮島の観光に関して、子どもたち自

身が問題意識を高め、評価させる。

- ・「持続性」の継承のために、今後の宮島の観光地としての課題を明らかにした上で、具体的な改善プランを考え、表現させる。

以上の単元構成の視点に基づき、単元構成は次の5場面に分けることができる。

最初は、世界遺産「宮島」に対する問題意識を高める①問題設定場面である。次は、歴史・自然・風習・交通等の視点から世界遺産「宮島」の仕組みを調査させる②構造追究場面である。そして、世界遺産“宮島”の観光地としての仕組みを読み解かせる③構造分析場面を位置づける。また、これらの認識に基づいて、④解釈構築場面において、これからの宮島観光について具体的な改善プランを形成させる。そして、最後にその改善プランについて話し合う⑤解釈吟味場面を位置づける。

(2) 単元の構成内容

①問題設定場面

地元の子どもたちにとって、宮島は身近な存在である。しかし、多くの子どもが「厳島神社や新しい水族館がある。世界遺産で、赤い鳥居があり、周りに鹿が多い」等の表面的な理解に留まっている。最初に、子どもたちに宮島に行った経験や体験からのイメージを交流させた上で、その他の日本の観光地について質問する。すると、ディズニーランドや京都の金閣寺、姫路城や沖縄等を答えるであろう。次に、「日本にはたくさん観光地があるけど、外国人にとって宮島は日本の観光地で何位だと思う。」と問うと、「世界遺産だけど、多分、京都や沖縄の方が有名だから、10位ぐらいかな」と予想するであろう。そこで、宮島は、外国観光客が行きたい日本の観光地の1位であることを知らせた上で、「なぜ、外国人は宮島に来たがるのだろうか。」と学習問題を成立させ、予想させる。

②構造追究場面

子どもたちの予想を整理し、自然・歴史・建物・風習（食べ物）・交通などに分類した上で、其々の視点に関して宮島の魅力のひみつを調べる調査活動を行わせる。資料やWebでは解決できない内容については、実際に宮島に行き、厳島神社のつくりを調べたり、宮島のお店の方や厳島神社の神主さんに聞き取ったりする活動を行い、其々の視点ごとにまとめさせる。自然に関しては、「信仰上の理由から人間の活動が制限された為、弥山の原始林、ミミズバイ等自然の特色とシカ、サル、ミヤジマトンボ等の生物の特色があること」、歴史に関しては、「厳島神

社が593年に佐伯鞍職により創建され、1168年に平清盛によって今の形に造営され、神聖な島として多くの観光客が訪れていること」、建物（厳島神社）に関しては、「幾度の災害（火災・台風等）に遭いながら、建て方の工夫等で再建されていること」、風習に関しては、「島全体が神域だったために、信仰上の理由から、耕作・機織りの禁止、葬式と墓の禁止、出産が禁止されていたこと」、交通に関しては、「当初、帆船等を利用しており、宮島と本島は300mしか離れていない部分があること」等のことが調査されることが予想される。そこで、調べて分かったことを発表し、交流し、宮島に対する基本的な情報を獲得させる。次に、宮島が世界遺産である理由を調べたことから考えさせ、造られた当時の姿を残し、海上に立地し、背景の山と一体となった景観が維持されていることをまとめた上で、宮島が外国人をひきつける魅力について意見交流する。

③構造分析場面

最初に、宮島の魅力について発表した後、江戸時代から神社を中心とした観光地であったことを確認した上で、「なぜ、宮島は、長い間、観光地であり続けることができたのか」と学習問題を示す。江戸時代の宮島の様子を描いた絵図を提示し、絵図に描かれている内容を調べ発表させる。この絵図では、今と変わらない厳島神社と共に武士や町人等が行き交い、船着き場やお土産屋などが描かれ、観光地として賑やかな様子を示している。この絵図から、江戸時代と現在の観光地としての仕組みを、観光資源、サービス、交通の視点から意見交流しながら板書にまとめていく。そして、観光地であり続けた理由を子どもなりにまとめさせる。

次に「この3つの中で一番大切なものは何だと思いますか」と問い、観光地として各々の視点の価値づけを行った上で、「宮島はこれから先も外国人が一番行きたいと思う観光地であり続けることができますか」と「持続性」について考えさせる。

④解釈構築場面

最初に宮島が観光地であり続けることができるかどうか意見交流した上で、「宮島がこれからも観光地であり続けるには、どうしたらいいと思いますか」と問い、3つの中で一番大切だと思うことを理由をつけて判断させ、改善点について考えさせる。観光資源である「自然と建物が一体となった景観」を選んだ児童は、景観を維持する為に行えることを考えるであろう。また、サービスを選んだ児童は、現在の土産物から、新しい商品について考えるであろう。そして、交通を選んだ児童は、現状の観光客

数から、宮島までの航路の問題と広島県のアクセスの問題について考えることが予想される。これらの案を具体的に選択したメディアで表現させる。

⑤解釈吟味場面

宮島が観光地であり続ける手立てについて具体的な案を発表させた上で、各々の内容について、妥当であるかどうか話し合わせる。その後、具体的な案をまとめ、廿日市の役場に提案し、意見をいただく。そして、最後に、世界遺産は、これからどのように維持されなければならないのか、自分自身の意

見を形成させる。

以上の単元の展開は表2のようにまとめることができる。

表2 単元 世界遺産「宮島」の指導計画

*全12時間()の数字は時間数

次	場面	学習内容	認識内容	教材・教具
1 (1)	<導入> 問題設定 場面	1. 宮島に対するイメージと他の日本の観光地の交流 2. 外国人が行きたい観光地調査結果の提示による学習問題の提示と予想の設定	○認知的不調和による学習問題の認識	・宮島, 姫路城, ディズニーランド等の観光地の写真 ・観光地調査結果のグラフ
2 (3)	<展開I> 構造追究 場面	1. 予想の交流による分類と調査問題の設定(自然・歴史・建物・風習・交通) 2. 調査活動の実施(書物・WEB・見学) 3. 調査結果の交流	○予想の分類による調査問題の認識 ○宮島の概括的認識	・印刷資料(宮島本など) ・Web資料 ・見学のしおり
2 (2)	<展開I> 構造分析 場面	1. 学習問題の設定と絵画の読み取り 2. 観光地の仕組みの追究 3. 観光地に関する各々の視点の価値づけ	○観光地の仕組みの多面的認識 ○価値対立場面の認識	・絵画資料(江戸時代の宮島, 櫓船, 帆船など) ・写真資料(宮島の景観, もみじ饅頭, 杓子)
3 (3)	<展開II> 解釈構築 場面	1. 観光地の改善視点に応じたグループの設定 2. 観光地の改善意見に基づく, メディアの制作	○思考の表現を通じた認識内容の強化 ○協同的学習による認識内容の強化	・絵画資料, 写真資料 ・意見形成プリント
4 (3)	<まとめ> 解釈吟味 場面	1. 制作したメディアの発表 2. 各々の意見についての討論(実現性の立場からの評価) 3. 役場への提案 4. 世界遺産の持続性に対する意見形成	○討論を通じた各々のメディアに関する多様な対策の認識 ○自らの認識内容の修正と知識の再構成	・プロジェクター ・インタビュービデオ ・振り返りシート

6. 授業の実際

本開発授業は、広島大学附属小学校4学年を対象に実施した。最初に、「なぜ、外国人は宮島に来たがるのだろうか」といった学習問題（問題設定場面）を成立させ、予想を立て、追究させた（構造追究場面）。この追究場面の中で、書物と宮島への調査活動を実施し、自然・歴史・建物・風習・交通の視点ごとに、調査したことをまとめ、交流した。



図2 宮島見学の様子

構造分析場面では、最初に、宮島の魅力についてまとめた後、江戸時代から神社を中心とした観光地であったことを押さえて、「なぜ、宮島は、長い間、観光地であり続けることができたのか」と、本時の学習問題を確認させ、江戸時代の宮島の様子を描いた絵図（図3）を提示した。この絵図では、厳島神社と武士や町人等が行き交い、船着き場やお土産などが描かれ、観光地として賑やかな様子を示している。（以

下、Tは、発問、Cは、児童の反応）

T この絵画には何が描かれていますか、気づいたことを教えてください。

C 厳島神社が描かれ、回廊なんかが今とよく似ている。

C お侍さんやシカがいる。何かを売るお店がある。

C 舟がたくさんあって、荷物があり、マークがある。

T お店はお土産屋さんですよ。何を売っているのかな。

C 江戸時代だから、色楊枝やしゃもじかな。

T でも、神聖なる島だから木を切ってはいけないのではないかな。

C 本当は駄目だけど、生活のためには少しの伐採は許されていた。

T そうか、では、今有名なお土産であるもみじまんじゅうはいつ生まれたの。

C 明治時代に伊藤博文のエピソードから生まれた。

T でも、もみじまんじゅうもしゃもじも今も売っていますよね、なぜ、ずっと売れているのかな。

（しゃもじに書かれている文字やもみじまんじゅうの味の工夫に関する話し合い）

C しゃもじは、時代に応じて大きさや文字を工夫している。もみじまんじゅうは、時代に応じて味を工夫している。時代に応じて作り方や味を工夫しているから続いてきた（サービス）。

T この絵の船はどんな種類の船ですか。

C 帆船じゃないかな。櫓船もある。

T なぜ、櫓船や帆船があるのですか。

C 短い距離は、櫓船で長い距離は帆船じゃないかな。

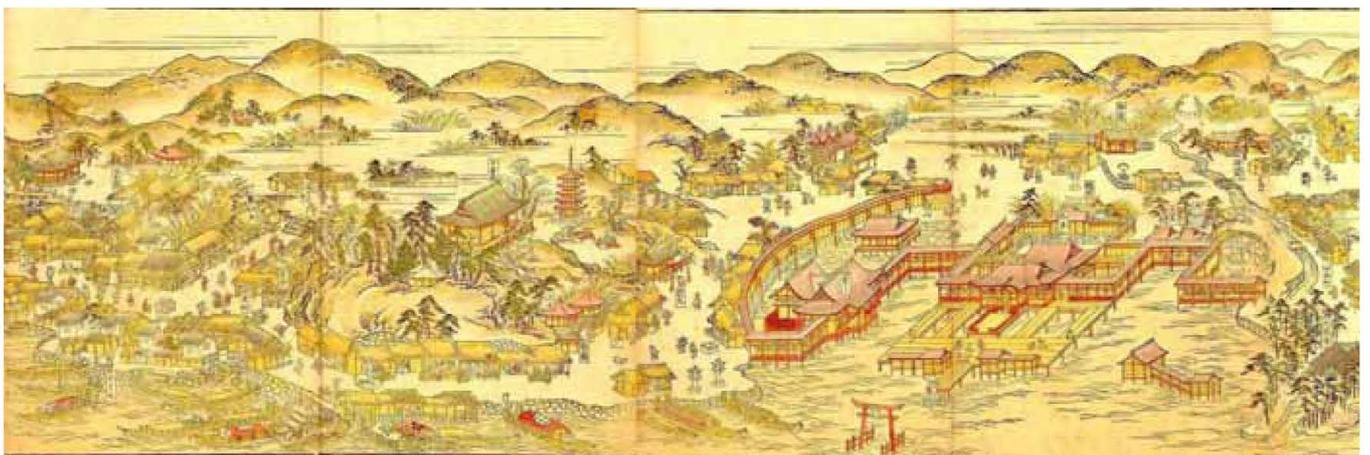


図3 享保5年（1720年）貝原益軒の厳島図

(フェリーと比較し、宮島への交通手段の話合い)

C 時代の変化に合わせて交通も変わっている(交通)。

T 観光地であるためにほかに必要なものはないですか。

C 観光したい建物とか自然とか、宮島なら厳島神社。

T 宮島が世界遺産に選ばれた一番大きな理由は何。

C 自然と建物が一体化した景観です。

T なぜ、宮島には自然が残っているのですか。

C 宮島は、神が宿る島として自然が大切にされ、耕すことができなかつた。弥山は昔から変わっていない。

T なぜ、厳島神社は造られた当時のまま残ることができたのですか。厳島神社は海に面して弱そうですよ。

C 宮島の回廊の木と木の間は隙間が空いていて、水が逃げるようになっている。

T それだけですか。台風が来た時の宮島の様子を見てみましょう。

(災害時の映像の視聴①)

T こんなに大きな台風が来たら、回廊などたくさんものが破壊されていますよね。でも、災害が来ても大丈夫だったところがあります。どこでしょうか。



図4 映像を視聴する児童

T 何を守ろうとしているのですか。

C 寝殿の中心の、ご神体がある所。

T つまり、本殿が災害に遭っていないんですね。(災害時の映像視聴②)

T 気づいたことを教えてください。

C 台風が来て海が高くなったり、風が強くなったりしたら、回廊などが壊れることで、本殿を守るように作られている。

T 厳島神社の建造の工夫が、厳島神社が造営した当時の面影を残している理由ですね(観光資源)。



図5 実際の授業の板書

最後に、「宮島」の観光地としての持続性から、観光資源、サービス、交通の3点を視点にまとめ（図5）、各々の視点に関して、児童に意見を書かせた。

<児童の意見>

A：私は宮島が観光地であるためには、今の景観を守ることが大切だと思います。今の景観は、昔の人が厳島神社の建て方を工夫したり、現在の神主さんとかが鳥居の下の砂浜をきれいにしたりして守っているから美しいんだと思います。あまり、観光客が増えたら汚くなる可能性もあるから、今より観光客は増えてほしくないけど、宮島に参拝したら、宮島が美しくなるように、ゴミを拾ったり、掃除したりするエコツアーを考えて、宮島の良さを考えてもらったらいいと思います。

B：宮島が観光地であり続けるには、景観を守ることも交通も大事だけれど、楽しみがなければ、そのうち行かなくなると思います。確かに、今、もみじ饅頭は有名だけれど、広島に来たら何処でも買えるので、宮島でしか買えない新しいお土産を考えたらいいと思います。また、宮島歌舞伎はあまり有名ではないので、定期的にできるようにすれば、もっと、たくさんの人が来ると思います。

C：観光地であり続けるためには、宮島までの交通が便利でないとあまり行きたい気持ちになりません。広電だったら、市内から宮島まで時間がかかるし、外国の人が来たくても、広島空港から広島駅まで1時間以上かかるし、その後電車に乗って来るのは大変です。だから、広島空港から広島駅まで鉄道がないといけなし、広島駅から宮島までの直通の電車があればいいと思う。

7. おわりに

本研究では、本校がこれまで策定してきたESDカリキュラムの改善を図るために、世界遺産学習に焦点づけ、世界遺産「宮島」を事例にした教材開発と授業実践を行った。ESDカリキュラム構成に関する成果と課題、また、本開発授業に関する成果と課題は、次の通りである。

本校のESDカリキュラムに関しては、カリキュラム構成上、世界遺産学習は、4学年に位置づいていた。これは、4年生の社会科教育内容に、地域の伝統産業が位置づいているからである。今回の授業実践を通して、多くの児童が観光地の立地条件を多様な観点から読み解き、持続可能な社会の仕組みについて理解し、今後の宮島観光の持続性について意見を形成できたことから、4年生段階において世界遺産学習をカリ

キュラム上、位置づけることは妥当であると結論づけた。しかし、世界遺産学習が、本校のカリキュラム上、地域学習として4年生のみ位置づいている。今後、日本各地の世界遺産、世界の世界遺産といった内容の系統を取り、発達段階に応じたカリキュラムの改善を図ることが課題となると考える。

また、本開発授業については、これまでの小学校社会科のESDの実践は、具体的に何をどのように学習するのか明確になっていなかった。しかし、本研究では、「持続性」をキーワードに、世界遺産は「持続性」を実際に証明した社会事象であると規定し、その「持続性」を可能にした社会を読み解く授業構成論理を示し、実証的にその意義を明らかにした。つまり、世界遺産「宮島」を「観光」を視点に「持続性」を可能にした仕組みを読み解くことが、小学校社会科におけるESDとしての意義につながることを実証的に明らかにしたのである。このことは、今後、世界遺産学習を開発する上で、ESDの学習モデルとして一石を投じるものであると言えよう。

今後、附属小型ESDカリキュラムの改善を図るために、他の事例についても実践を深め、実証的検証を図り、小学校段階におけるESDカリキュラムの可能性について研究を深めたいと考えている。

註

(1) 広島大学附属小学校「Ⅱ. 社会のグローバル化に対応した広島大学附属小学校の取り組み」『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発—大学と連携した研究開発システムの構築に向けて—』広島大学附属学校園研究推進委員会、2013、pp.6-9.

(2) 「持続可能な社会」といった文言は、2008年からの小・中・高の学習指導要領、指導要領解説編において示されている。なお、小学校では「持続可能な社会の実現」、中学校では「持続可能な社会の構築」「持続可能な社会を形成」、高等学校では「持続可能な社会の実現」「持続可能な社会の形成」といった文言で示している。

(3) ESDの現状に関しては、次の文献を参考にした。

- ・野村康「アジア太平洋地域におけるESD：研究の現状と課題」『環境教育』Vol.20-1、2010.
- ・阿部治「「持続可能な開発のための教育」(ESD)の現状と課題」『環境教育』Vol.19-2、2009.

(4) 田淵は世界遺産教育推進の立場から世界遺産教育とESDの関係を明らかにしている。

田淵五十生『世界遺産教育は可能か—ESD（持

続可能な開発のための教育)をめざして一』東山書房, 2011.

(5) 世界遺産教育に関しては次の論文を引用・参考にした。

長谷川俊介「世界遺産の普及と教育」『レファレンス』5月号, 2010.

(6) 前掲書(註4) p.29.

(7) 前掲書(註4) p.41.

(8) 宮島の概要に関しては, 次の文献を参考にした。

廿日市商工会議所テキスト編集委員会編『宮島本』廿日市商工会議所, 2008.

(9) 「外国人観光客お気に入りの観光スポット2011」トリップアドバイザー, (<http://www.tripadvisor.jp>)

(10) 「世界遺産の登録基準」日本ユネスコ協会 (<http://www.unesco.or.jp/isan/decides/>)

(11) GRIP文化政策プログラムチーム著「GRIPS文化政策ケース・シリーズ5世界遺産宮島厳島神社1」文化庁委嘱『文化芸術振興による経済への影響に関する調査研究』, 2005, p.8.

(12) 前掲書(註5) p.26.

(13) 小松原尚「観光地の立地条件」『地域創造学研究Ⅲ』第20巻第1号, 2009.

(14) 宮島の基本的な情報に関しては, 前掲書(註8)とともに次の文献を参考にした。

・中国新聞社『世界文化遺産の島宮島を楽しむ』中国新聞社, 2006.

・船附洋子『厳島絵地図 宮島に生きた先人たちの足跡を綴る』ザメディアジョン, 2011.

(15) 宮島グランドホテル有もとHP (<http://www.miyajima-arimoto.co.jp/index.html>)